

希望館

(同志社女子中学校・高等学校)



竣工日：2016年3月



黎明チャペル



アトリウム

1950年に木造二階建ての初代希望館が竣工された。新校舎名が公募され、当時の生徒が「希望館」と創名し、その生徒は父母の会から表彰されたという記録が残っている。その名称「希望館」が、1965年に竣工された二代目希望館と今年完成した新希望館に受け継がれることになった。「希望館」創名の由来の記録は残っていないが、きつと戦後の混乱のさなかに様々な「希望」を胸に抱いたことだろう。また、毎日の礼拝を大切する同志社女子中高の生徒らしく、その生徒の脳裏に聖句の「希望」(ギリシャ語エルピスを語源とし、「救い主の約束を待ち望む」という意味)が思い浮かんだに違いない。

希望館の魅力は見通しの良さ、風通しの良さであり、互いに視線を交わすことで一体感が生まれる。目には見えないネット社会の渦の中を生きる私たちは、本当に正しい情報を見失いがちになるが、希望館は私たちに本当に大切なことを教えてくれる空間となる。同志社女子中高の新しい歴史を刻む希望館全体を、「ここを育む『学びの森』と捉えた時、回遊性のある廊下や通路は森の散策路となる。散策路を探索する生徒たちは、森の小屋(中学生のホームルーム教室や教科の特別教室)や木漏れ日の広場(各フロアにある調べ学習ができるメディアコーナー)で日々学びあう。森の中央部には光あふれる緑の広場(吹き抜けの空間としてのアトリウム)があり、多彩な学びや交流活動の中心となる。森の木陰には祈りの小部屋(黎明チャペル)があり、神さまと対話する時を過ごすことが出来る。この「学びの森」で生徒たちは友だちや教職員と出会い、よい交流をすることで、一人ひとりの可能性が花開き、こころ豊かな女性に成長することを祈っている。

アーモスト館
(同志社大学)

竣工日：1932年3月20日

同志社アーモスト館は1935年（昭和10）10月29日献堂式を挙行了た。この式を報じた記事が、同志社創立60周年記念誌『我等の同志社』（1935年）に掲載されている。その冒頭部分には同館の起源について次のようにある。

北米マアチュセツト州なる新島先生の母校アーモスト大学は、今より十数年前に行はれた同大学創立百年記念祭に当り、我同志社大学校庭内に新島記念館を建設せんことを提唱し、その計画は全アーモストマンの賛成する所となり、爾来関係者一同は熱心に該館の資金募集に努力した（全て常用漢字に直した）

この記念館建設を前提として、アーモスト大学は交流を目的として同志社へ同大学学生代表を派遣した。その初代学生代表で、早世したスチュアート・バートン・ニコルズの親族からの寄付2億5千万ドルを含め、アーモスト大学の卒業生らが集めた約6万ドルをもとに、同志社が準備した土地で1932年（昭和7）3月20日、同志社アーモスト館は竣工した。設計はヴォーリス建築事務所による。

同志社アーモスト館は、1932年の竣工時より長きにわたり学生寮として使用されていた。また、館内ホールは式典や講演会のみならず結婚式でも利用された。老朽化のため2008年（平成20）10月から補修工事が行われ、工事終了後の翌年5月末からは主に外国人研究者の宿泊施設として利用されている。